

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
徳・知・体のバランスの取れた質の高い桜っ子の育成 —桜岡「や」「か」「た」づくり—	① 学力の向上 ② 生徒指導の充実 ③ 体力向上の取り組み ④ 教育の質の向上に向けたICT活用教育の実施 ⑤ 特別支援教育の充実

達成度 A:ほぼ達成できた
B:概ね達成できた
C:やや不十分である
D:不十分である

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価							
① 学力の向上							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	● 学力の向上	分かる授業への改善を行ったか。	・しっかり考える場を設定する。 ・考えを表現し、伝え合う場を工夫する。 ・特設時間の指導の充実を図る。 ・算数の重点単元の指導の強化を図る。 ・給食前の「はらぺこ算数」の場を作り、個別に支援できる体制をつくる。	・自分の考えを書く場をつくる。 ・「すいすいタイム」と「桜っ子タイム」の計画を見直し、充実させる。 ・重点単元の指導体制の強化を図る。 ・給食前の「はらぺこ算数」の場を作り、個別に支援できる体制をつくる。	A	・校内研究では、「桜岡スタイル」を全職員で共通理解し、自分の考えを表現させ、交流する場を工夫した授業実践に取り組むことができた。研究授業を行い、算数科の重点単元の指導の強化を図ることができた。既習したことを活用する力をつけるための授業の工夫が課題である。 ・「すいすいタイム」では活用する力、「桜っ子タイム」では算数的表現力をつけるために、各学年ごとに年間計画を立て、問題に取り組むことができた。全職員で指導に当たり、複数の教師が支援の必要な児童に、個別に支援することができたことは良かった。 ・給食の準備時間を使った「はらぺこ算数」では、個別に支援の必要な児童に、基礎計算の補充指導を行った。児童に応じて文章題や宿題・テストのやり直しなどにも取り組んだ。級外の教師で支援することができた。	・校内研究では、「活用する力を育むための算数科学習指導法」について、職員の意識をさらに高めながら、具体的な実践を行って、授業をよりよいものに工夫していく。 ・「すいすいタイム」「桜っ子タイム」を今後も工夫して計画・実践し、算数的表現力や活用する力を確実に付けていく。取り組む問題についても吟味して改善していく。 ・支援の必要な児童については、今後も「はらぺこ算数」で補充指導を続けていく。児童に応じた内容を指導し、基礎学力を確実に付けていくようにする。
教育活動	● 学力の向上	児童の基本的な学習習慣は育成できたか	・背筋を伸ばし、相手の目を見て、手まぜをしないう「背・目・手」を意識した学習態度を、85%以上の児童が身につける。	・授業の始まりと終わりに「背・目・手」と号令をかけ、姿勢をよくして、学習の構えを作る。 ・ノートの書き方を具体的に指導する。 ・休み時間の合い言葉「さ・く・ら」、授業中の「ふ・で・ば・こ」の合い言葉を職員間で共通理解し、各学級で徹底していく。	A	・授業前後の挨拶「背・目・手」の号令のかけ方やめあてを発表することに関しては、全校の共通理解ができていたので、どの学級でも学習の構えは整っている。 ・算数の授業を中心に、上手なノートの書き方を意識しながら指導した結果、ほとんどの児童が流れに沿った分かりやすいノートを取ることができるようになってきた。また、上手な児童のノートを「ノート名人」として低・中・高学年に分けて掲示し紹介した。 ・休み時間の「さ・く・ら」「ふ・で・ば・こ」については、チャイム着席はできても、授業の準備ができていなかったり、話の聞き方はよくても返事ができなかったりと項目ごとに定着に差があるので、繰り返し指導していく必要がある。	・授業以外の場面でも「背・目・手」の号令を用い、話を聞くための構えとして定着させていく。 ・ノートの記入については、算数で高められたノートをまとめるコツやまとめようとする意欲を他の教科や場面でも生かせるよう指導を継続していく。 ・休み時間の「さ・く・ら」、授業中の「ふ・で・ば・こ」については、各学級で随時確認する機会を設定することで全体的に取り組む意識を高めた。また、個人の定着の差については、児童一人一人に自分がどれだけできているのかを振り返らせることにより、今後の取り組みへの意欲化をねらいたい。
教育活動	● 学力の向上	家庭学習の充実を果たせたか。	・学年×15分を目標に家庭学習を行う習慣を身につける。	・家庭との連携を深め、家庭学習カードを活用する。 ・「家庭学習の手引き」を全家庭に配布し活用を呼び掛ける。 ・自学ノートのモデルを活用して意欲を持たせる。	A	・全学年に生活カードを持たせ、学校や家庭での生活や学習について振り返りをさせたことで、児童に規則正しい生活をしようというめあてをもたせることができた。また、教師は、児童の様子を把握することができた。保護者にサインしてもらったり一言感想を書いてもらったりしたこと、家庭との連携も深めることができた。 ・「家庭学習の手引き」を全員に配布し、学習机の前に掲示させることで、テレビやゲームの時間に気を付けさせた。児童に声をかけ、守らせようとしている保護者も多い。 ・自学ノートについて児童に提示し、モデルとなるノートを掲示したり、お便りに載せたりしたこと、保護者の関心も高まり、自主学習の内容も充実してきた。	・引き続き、全学年に生活カードを持たせ、児童の様子を把握し、家庭と連携して指導を続けていく。 ・「家庭学習の手引き」を4月に配布し、家庭での学習時間や約束を守るように、児童や家庭に呼びかける。 ・自学ノートの取り組みについて、児童と家庭に伝え、自主学習を推進していく。手本になるノートを提示し、児童の学習意欲を高める。
② 生徒指導の充実							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	● 心の教育	子どもの支援体制づくりとケース会議の充実は図れたか。	・保護者から相談しやすいと思われる認知度を80%以上にする。 ・不登校児への対応を図る。	・気になることを、家庭と連絡しあうよう努める。 ・子どもを支援する校内委員会を充実させる。 ・見守りたい子の共通理解を図る。(年4回見守りたい子の連絡会と毎月の生徒指導会) ・相談体制の充実を図る。 ・欠席者報告票による児童の状況を把握する。 ・毎月1回の生活指導会を実施する。	A	・気になることを、家庭と密に連絡しあうよう努めた。 ・見守りたい子の共通理解を図った。年4回見守りたい子の連絡会と毎月の生徒指導会。 ・毎月1回の生活指導会が実施できた。しかし不登校気味の児童に対する報告の時間がとれなかった。 ・不登校児童を支援する校内委員会の場が持たなかった。 ・相談体制の充実を図る。 ・欠席者報告票による児童の状況を把握しなかった。	・スクールカウンセラーの利用としては、継続の児童・保護者が多くいた。カウンセラーの存在が心の拠り所になっている。また新しく相談に来る児童も増えた。保護者の要求に応じて、担任以外にスクールカウンセラーや関係機関などの相談の場があることを知らせていく必要がある。 ・見守りたい子や気になる児童の共通理解を図ることができた。その都度、支援体制を話し合うケース会議を開くことで、担任だけで抱えることがないように配慮することができた。 ・不登校については、保護者、担任、職員、カウンセラーが連携して改善に向かっていく児童もいる。しかし、改善が見られない児童もいるので、担任だけで抱え込まないような手立てが必要である。また、不登校及び傾向がみられる児童に関しての報告の時間が持たなかったため、生活指導会と合わせた「教育相談会」の時間の確保ができなかったため、時間設定を工夫する。
教育活動	● 心の教育	笑顔であいさつを行ったか。	・進んで、元気に、笑顔であいさつする子を80%以上にする。	・毎週月曜日の「あいさつ運動」に自主性を持たせるように工夫する。 ・教師が率先して、元気なあいさつを行う。 ・「親子でめざそう！ 朝のあいさつ」をPTAと共に具体的に取り組む。	A	・月曜日のクラスごとのあいさつ運動に元気に取り組むことができた。 ・あいさつ名人を放送したりあいさつの木にシールを貼らせたりしたこと、あいさつをしようという意欲をもたせることができた。 ・会釈の仕方を指導したが、会釈をする児童を増やすことができなかった。 ・PTAと協力して朝のあいさつに取り組むことができなかった。	・自分から先生や友だちにあいさつをしているという児童は85%である。「あいさつ運動」や教室などで、友だちと一緒に元気なあいさつができていた。しかし、自分一人だと小さい声になったりあいさつをしなかったりする児童も少なくないと思われる。今後も教師が率先して元気なあいさつを行い、あいさつの声が飛び交うような学校にする取り組みを工夫していく必要がある。 ・「あいさつ」の取り組みの成果が出ていると感じている保護者は、74%で校外でのあいさつに課題があると考える。保護者と共にあいさつ運動に取り組むなど、具体的な方法を考えていくことも必要である。
教育活動	● いじめ問題への対応	いじめの早期発見と早期対応はできたか。	・いじめを早期に発見し、早期に対応することにより深刻化を防ぐ。	・「いじめ0宣言」を行う。 ・年間2回のいじめアンケート、「月の心」を通じて、いじめの早期発見に努める。 ・毎月10日に「心を考える日」の取り組みを行う。	A	・「いじめ0宣言」を朝の会・帰りの会などで唱和することにより、友だちを大切にしていじめを許さない、という意識を育ててきた。 ・年間2回の「いじめアンケート」の実施したり、状況に応じて心の状態を自由に記述させたりした。そこで、気になる児童に対しては早めに相談や支援をして、早期解決にあたった。 ・毎月10日に「心を考える日」として、人権教育の充実を図ってきた。 ・以上の様々な取り組みにより、大きな事案に発展することなく、児童は安心・安全な生活を送ることができた。	・今年度引き続き、いじめの早期発見に努め、児童への全体指導や個別対応に、細心の注意を払っていききたい。 ・職員の実質の向上を図るために、児童相談所などのいじめに関するエキスパートを講師として招聘し、職員研修を実施したい。
学校運営	● いじめ問題への対応	いじめに教職員一体となった対応ができたか。	・いじめに一人ずつ対応することなく、教職員が協力して課題解決にあたる。	・学年グループ、生徒指導部が中心となって、複数の目で児童理解に努め、いじめの防止・対応にあたる。	A	・いじめにつながるような言動に気づいたり、見かけたりした場合、担任・学年だけでなく、教育相談担当、特別支援教育コーディネーター、生徒指導担当、スクールカウンセラー、教務、教頭、校長が「早く」「正確に」情報共有できるように、まずは、口頭で報告し、必要に応じて文書で閲覧した。昨年度比べ、職員集団が一体となった対応がスピード感に不足する場面もあった。チームによる早期の取り組みで、いじめが深刻化することはなかった。	・いじめの早期発見に努め、学校全体で取り組むべき最大課題であるという共通認識をもつ。その上で、児童の個別指導や学級指導など細心の注意のもと取り組んでいきたい。

③ 体力向上の取り組み							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	● 健康・体づくり	外遊びの奨励と体育の充実をすることで体力は向上したか。	・外遊びの奨励と体育活動の充実で体力の向上を図る。	・20分休み、昼休みは、外で遊ぶ。 ・マラソン大会・長縄とび大会の実施。 ・わくわくタイムでの共遊(異学年交流) ・主体的な体育学習のカードの活用を図る。	A	・運動委員会が毎日コーンや空気入れ、ピンスなどを昼休みに用意し、外遊びを促した。 ・マラソン大会、長縄とび大会を企画、運営し、体力向上に寄与することができた。 ・小城市教育フォルダにある体育学習カードを活用して学習を進めることができた。	・外遊びに個人差があるため呼びかけなどの手立てをとる。 ・体育学習カードの共有を深化させる。
教育活動	● 健康・体づくり	新体力テストの実施によって全児童の実態把握ができたか。	・計画的に新体力テストを実施する。 ・体育授業における6年間を通じた体力向上に取り組む。	・6年間を見通した「体づくり運動」に計画的に取り組む。 ・実態把握によって、特に落ち込んでいる分野の向上を図る取り組みを行う。	A	・新体力テストを全学年で実施し、結果をまとめた。全職員で実態を把握することができた。	・新体力テストの実施方法の見直し。(全学年一斉実施) ・新体力テストの結果の効果的な活用。

④ 体力向上の取り組み							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	● 教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	ICTを利活用して学力の向上を図ったか。	・ICT機器を有効に活用して、効率的な学習活動を工夫する。	・デジタル教科書の活用方法を工夫する。 ・ICTの利活用を通じた授業実践について、校内研究の中にも位置づけて、取り組む。	A	・デジタル教科書は、拡大提示としての使い方の他、映像資料や、音声教材としても使用することで、日常的に活用することが増えた。 ・昨年度は各教員がICTを取り入れた計画を立て、それをもとに1年間の実践を行ってきた。今年度は昨年度の課題をいかした計画を立てることで、学校全体を通してタブレットPCの利用頻度が増えた。しかし、タブレットPCの有効活用について、アイデア、知識共に不足しており、まだまだ学力向上に貢献できると考える。 ・校内研究では、主に授業の導入場面や、活用問題の場面で、児童がより思考力を高める手段として、ICT機器を利活用することができた。	・小城市学力向上研究会のICT部会の発表等を参考に授業におけるタブレットPCの活用機会を増やしていく。 ・他県・他地域など、先進地域の情報を取り入れ、学習指導に生かしていく。
教育活動	● 教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	教職員のICTを利活用した実践力が向上したか。	・電子黒板を活用した授業ができる教職員の割合を100%にする。	・全教職員が参加する校内研修会を通じて、実践力の向上を図る。 ・先進的な取り組みを紹介し、自己研鑽の資料として活用する。	A	・夏休みに全職員参加のタブレットPCを用いた研修を行った。この中で、授業におけるタブレットPCを用いた授業を紹介して、教職員のICT活用力の育成を図った。 ・また自作コンテンツや学習の手助けとなるサイトを紹介するなど、教師間での共有を図った。 ・今年度は教職員ICTの利用に慣れて来たことや、研修の成果もあり、評価ポイントが昨年よりも上がっている。しかし、児童の評価ポイントはICT機器に慣れはじめたことから新鮮さが薄くなり、昨年より下がっていると考えられる。	・教職員のICT研修などの時に、ただ使用だけでなく、より効果的なICTの活用方法について研修を深める。 ・情報活用力のみに力を入れるのではなく、職員の著作権に関する知識を増やし、情報活用力アップを図る。
教育活動	● 教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	児童の情報活用能力が高まったか。	・ICT機器を用いて、調べ活動をしたり、情報を発信したりする能力を高める。	・インターネットでの調べ活動を、いろいろな教科の中で取り入れる。 ・電子黒板を使って発表したり、パソコンの利活用に慣れ親しむ。	A	・今年度は低学年でもタブレットPCを用いた授業を定期的に行い、ICT機器に触れる機会を増やすことができた。中・高学年でも総合的な学習を中心とした課題解決学習や情報発信のためにプレゼンテーションソフトを使った学習を実践することができた。しかしインターネットを使った情報収集の場面では必要な情報の取捨選択ができていない様子が見られ、情報活用能力をより高める必要がある。 ・また昨年同様、算数では、児童が電子黒板を用いて自分や友だちの考え方を発表したり、話し合ったりする活動ができた。	・教職員のスキルのみでなく、児童のスキルアップを図り、情報活用力を高める。 ・情報モラルについて継続的に指導を行い、情報の真偽を判断する力をつけさせる。 ・インターネットの膨大な情報の中から必要な情報を探し出す方法や、スキルを身に付けさせるような指導を学習の中に取り入れる。

4 本年度のまとめ・次年度の取組
 保護者アンケートにおいては、全体的に見れば今年度重点的に設定した目標が、「概ね達成」できたものとする。全職員が同じ意識をもって、組織的に学校目標の達成に向けて取り組む事ができた。「わかる授業」の具現化のために、校内研究で、「活用する力を育むための算数科学習指導法」について、さらに研究を重ね、授業の工夫をしていきたい。また、算数科だけでなく、学習指導法を他の教科まで広めて、学力向上を目指していく。「心の教育」「いじめへの対応」「特別支援教育の充実」など、まだまだ継続して取り組むべき課題もある。特に、不登校傾向の児童に対する共通理解の場の設定と、対策について全職員の共通理解・対応を実践していく必要がある。日々の授業実践の充実、学級経営の活性化、ICT機器の効果的活用などを校内研修を通して充実させ、今後もよりよい桜岡小学校作りに努めていきたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目